

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：基礎研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520171

研究課題名（和文）中世王朝物語『海人の刈藻』の諸本校合と基礎研究

研究課題名（英文）Basic Study of The Japanese Medieval Court Literature “Tale of Ama no Karumo” and comparison study of its manuscripts.

研究代表者

塩田 公子（SHIODA TOMOKO）

岐阜女子大学・文化創造学部・教授

研究者番号：00215948

研究成果の概要（和文）：

現存する中世王朝物語の中でも、比較的多くの伝本を持つ、『海人の刈藻』は現在全国に15本以上の写本が確認されている。従来から、写本間の異同があまりない本文であるといわれてきたこの作品であるが、改めて、未入手、未見の3本（天理図書館本、大阪市立大学本、肥前松平文庫本）の蒐集と基礎的研究を行ったが、現在までのところ作品内容に大きく影響を及ぼす本文異同や書き入れ等のある本はない。

研究成果の概要（英文）：

Among medieval court literatures in existence, relatively many copies of “Tale of Ama no Karumo” exist, and presently 15 copies are identified in the country. Traditionally there are said to be few differences among its manuscripts. I have collected 3 copies which I had not read*, and done basic research on them. As a result, I found none of them had major differences or additional scripts which may change the story.

*copies in the possession of Tenri Library, Osaka City University and The Athenaeum of Bizen Matudaira

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	100,000	30,000	130,000
2008 年度	200,000	60,000	260,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総 計	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世王朝物語 『海人の刈藻』 改作本 諸本校合 天理大学図書館本 大阪市立大学図書館本 肥前松平文庫本

1. 研究開始当初の背景

（1）「中世王朝物語」は、かつては「擬古物語」と呼称されていた。『源氏物語』な

どの平安時代の王朝盛時の物語の影響を強く受けて成立した、鎌倉時代以降の物語のことであるが、平安時代の物語の多くが、豊かな研究史を持っているのに反して、まだ30年ほど前でさえ活字本の入手さえも、作品によっては困難な状況であった。

そんな状況の中、学生時代に古典研究会の「古典影印叢書」の写本で擬古物語を読む機会を得たとき、すでにたくさんの注釈に恵まれ、作品を読む以前にそれらの注釈を参照にせねばならぬという制約ゆえ、自由に作品を読む余地の少ない平安時代の物語と比較して、「擬古物語」は注釈さえ満足にないこともあり、読解の困難さがそれなりに読みの可能性を広げてくれるように思って新鮮に感じたこともあり、その後の研究テーマをこの「擬古物語」に定めた。

(2) 1988年(昭和63年)笠間書院が、「鎌倉時代物語集成」(全7巻、別巻1巻)の刊行を開始する。それまで、単行本や、叢書等にばらばらに収録されていた、鎌倉時代以後の物語の本文が、注釈はないものの、とりあえず同じ叢書のなかで簡単に読めるという画期的な事であった。

(3) 「鎌倉時代物語集成」は1994年(平成6年)に別巻(索引等)は別として、刊行終了したのをうけて、1995年(平成7年)から、同じ笠間書院から、「中世王朝物語全集」(全23巻、別巻1)の刊行が始まった。これは、本文、現代語訳、注釈からなる全集で、従来光があまりあたらなかった、中世の作り物語の研究が進む契機となると思われた。この刊行を契機に、鎌倉時代以降の物語の呼称が「中世王朝物語」と変わりつつかわれるようになり、「擬古」という前世代の模倣というイメージから、中世における積極的な物語制作の有り様が読み取れることとなった。

(4) そのような経緯のなかで、「中世王朝物語」のなかでも、『海人の刈藻』は中編で、登場人物、物語の筋、年立て等がよくまとまり、物語の表現も王朝盛時を彷彿とさせる表現、和歌等に心配りがされており、評価に値する作品であると言われている。鎌倉時代初頭(1200年頃)に成立した『無名草子』にその名を残しているが、現存の『海人の刈藻』は、その改作本と言われている。しかし、作品個としての研究は余り進んではいなかった。

2. 研究の目的

(1) 科研費取得以前の研究として、『海

人の刈藻』の成立に関する考察を行い、現存本と、『無名草子』にその名を残している「海人の刈藻」との関係を考察してきた経緯がある。その折に、大学の学部教育の中で、ゼミの演習で、『海人の刈藻』を取り上げた折に、学生達が積極的に諸本研究を行いたいと申し出たのをきっかけとして、『海人の刈藻』の写本研究をテーマにとりあげた。

(2) 30年前の段階では、『海人の刈藻』の活字本は、「桂宮本叢書」におさめられたものと、宮田和一郎『校注あまのかるも』のみであった。『国書総目録』によると、『海人の刈藻』の写本は、国立国会図書館本、静嘉堂文庫本、宮内庁書陵部本、実践女子大本、東京教育大本(2本)、東北大学図書館本(狩野文庫)、徳島県立図書館本(阿波国文庫本)、山口県立図書館本、島原県立図書館本(肥前松平文庫本)、彰考館本(2本)、尊経閣文庫本、天理図書館本、三手文庫本、と15本が登録されていた。

(3) しかるに、1980年に演習の為にこれらの写本を入手しようと試みた際に、「徳島県立図書館本」は、数年目に火事で焼失したとの報告をもらっている。

(4) また私の独自の調査で、実践女子大学には、それまで報告されていた「黒川本」の他に、「常盤松文庫」の整理とともに、もう1本の『海人の刈藻』の存在が確認された。

(5) 1980年の段階では、火事で焼失したと言われる阿波国文庫本以外の、14本の写本を入手(その折に、天理図書館本は、未入手、実践の常盤松文庫本を入手)し、学生とともに諸本校合の作業に取り組んだ。しかしなにぶん学部学生のため時間不足である以上に、『海人の刈藻』という作品自体が中編で、写本にして4冊本という量で、14本の写本を完璧に校訂することが出来ずに中断してしまっていた。

(6) その後、『補訂版 国書総目録』で、「大阪市立大学本」が、新たに加わり、先に記した、笠間書院の『中世王朝物語全集』2巻に、妹尾好信氏の校訂・訳注で『海人の刈藻』が収められた。その中で、妹尾氏は、「宮内庁書陵部蔵本」写本を底本に、「尊経閣文庫本」「三手文庫本」「山口図書館本」「島原図書館本」の4本で校訂した本文を作成しておられる。

(7) 以上の経緯をふまえて、今回の研究の目的は、自分の手元に無い、残る全ての写本のコピーをとり、写本の実態を調査し、今

後の基礎研究、本文研究、注釈研究に資する資料として残しておきたいと考える。

3. 研究の方法

(1) 2007 年度までに、未入手の「天理図書館本」「大阪市立大学本」の複製を手に入れること。『補訂版 国書総目録』に記載されている16本と、私が調査したことにより判明した、実践女子大学『常盤松文庫本』を合わせて17本の「海人の刈藻」の写本のうち、私の手元に無いものは蒐集して大学の図書館に『複製本海人の刈藻集成』として完成させるためである。

(2) 先の研究で確認した写本間の異同の問題をあらためて再確認、調査し、未見の写本を異同を付け加えること。

すでに先学桑原博史により「とくに系統をわかつほどの明確な本文異同はない」また、平林氏により「特に系統をわかつほどの差異はないが、強いてわかつとすれば、共通する異文の存在などにより、三つの系統に分類することができる」と言うことであるが、それを裏付けることができればと考える。

(3) 『海人の刈藻』の主題、および改作の問題を解決すること。

『無名草子』にかなり詳細にその作品内容が語られているわりに、『無名草子』中に引用された和歌が、現存本『海人の刈藻』に1首も無いことに関しては、すでに私見を発表したが、『海人の刈藻』が何故、またどのような作者によって改作されたかの理由は明らかではない。

他の王朝物語との比較との中で、物語の創作、改作の問題がすこしでも解明出来ればと考える。

4. 研究成果

中世王朝物語の中には、大きく分けて二つのグループに分けることができると考える。それは、『とりかへばや』『住吉物語』『しのびね物語』のように、たくさんのかつ広範囲の読者に読まれたと思われ、広く流布して、大まかな筋から細部に至るまで、違いが生まれ、たくさんの異本、また別系統とも思われる諸本を生んで行く物語のグループである。

それに対して、『夢の通ひ路物語』『松浦宮物語』『別本八重葎』のようにあまり広範囲で享受されたとは思われない作品のグループもある。とくに、『夢の通ひ路物語』『別本八重葎』などは天下の孤本といわれ、1冊がかるうじて残ったということは、たくさん読まれ書き写されるということがなかったわけである。

その理由は、一概には推しはかることはできないし、それぞれの作品が持っている内的事情も大きく関わるのであろう。

そのように後世の読者に読まれるか読まれないかという点で分けた場合、『海人の刈藻』は、少なくとも現存する写本が16本もあるということは、それなりに書写され、しかも私が見た限り、どの写本も大切に所蔵されてきたと考えられるのであるが、書写ではなく版本になって広範囲に流布し読まれた形跡がないのである。

そのことに関して、大変興味有る報告がされたのは、2008年2月の『国文学研究資料館紀要』に掲載された、小川陽子氏の『近世における中世王朝物語享受の様相』という論である。

私は先に述べたように、『増訂版 国書総目録』記載と、個人で調査した「常盤松文庫本」と合わせて16本が現存する全ての『海人の刈藻』の写本と考えていたが、氏の調査で新たに未紹介の伝本が5本と、黒川春村による『海人刈藻物語系図年立』の存在が報告された。これは、現在の写本16本の校訂ができればと安易に考えていた私にとって大変衝撃的な報告であった。

しかも、そのうち一つは、大阪の町人学者である入江昌喜(1722~1800)の詳細な書き入れがあるということである。

現在までの私の調査した範囲の写本類には、朱の書き入れや、誤字脱字の補足などさえない、綺麗な写本が多いと思われるからである。

江戸も後期になって、このように研究を目的とした読みによる注記が存在する『海人の刈藻』の写本が見出されるとということは、先に述べたように、読み物として流布し、版本として出版される類の物語とはまた違う、読者とそれを研究する人々が存在したということで、そのような動きのなかで書写という行為がなされて行ったと考えると、大変興味深いものがあると思われる。

そのような研究に触れて、今一度、『海人の刈藻』を根本的に捉え直す必要があると思われた。そのような折、2010年5月の『日本書房 古典・近代資料目録』に江戸中期後期写『海人の刈藻』が78万円で売りに出されていた。このような事実を考えあわせ、まだまだ今後このような新たな伝本の発掘が為されるだろうと思われる。

(1) 以上のような現在までの私の考察と、他の研究現状から考え、今後も新たな伝本等の発見により、『海人の刈藻』の作品内容に関わる発見が有ることが期待されるが、今回の研究では、まず当初の目標であった、未入手の大阪市立大学本、常盤松文庫本などの写本の複製を許可され蒐集したことは、今後の、

書き入れ本などとの違い、『海人の刈藻』の流布と、研究対象としての書写、校訂研究の動きを考えるための資料として大切であると考え。

しかし、今新たに未発表の伝本が1冊ならずとも複数発見されるということは、それらも蒐集の対象にしておかねばならないということで、今後の課題としたいと考える。

おそらく従来から指摘されていた事に加えて、1980年に学生達と14本の写本の校合(研究期間の制約により巻1のみ)と、この3年間の未見の写本を付き合わせて考えてみても、これらの写本には、極少ない箇所誤字訂正、朱点が見られるものの、本文解釈や注釈、引歌などの注記などは皆無といってもよい本ばかりなのである。なかには、書写されたのみで、ほとんど読まれた形跡のない写本もあるように思われる。

たとえば、本年島原の肥前松平文庫本を調査する機会を得たが、4冊本のうち、数カ所書写者が気づいて訂正したとおぼしき書き入れが有るのみで、ほとんど書写されたときのままのようである。無論、笠間書院の『中世王朝物語全集』の『海人の刈藻』の校訂でこの本を使われた妹尾氏や、先学は見ておられるのだが、書写された時代に、それを使って読み、研究のために使われたという形跡はないのではという意味である。

それに反して新出の伝本には詳細な注記や書き入れがあるということは、特別な動きをしてきた写本の一群が存在すると考えられる様な気がする。

この点も、小川氏などの近世の物語の享受に関しての研究成果を仰ぎつつ、作品の成立時期の特定も射程にいれて今後も考えて行きたい。

(2) 『海人の刈藻』の改作を中心とした基礎的研究に関して。

『海人の刈藻』はおそらく『無名草子』の評言をもとに、かなり実力のある歌人か、物語作者が、改作したものであると私は考えている。歌人が同時に物語作者であるということは、作者が判明している『松浦宮物語』のような場合は、その制作意図を推察する手だてもあると言うことであるが、当時の貴族はすくなくとも和歌は「日常会話」として機能した手段であるから、取り立てて歌人としての評判がなくとも、歌を読む訓練、勉強の一環として、既製の物語の場面を利用して、手すさびに物語の改作に手を出すのでは無からうかというのが、私の現在までの考えである。

しかし、先の研究成果(1)(2)でも述べたように、近世の国学者や、また町人学者の中で、物語の研究がなされていたとするな

らば、中世の物語の実態を如実にうつしている『無名草子』などは、まさに物語研究の為のバイブルとして珍重されていたことも十分うなずける。

『海人の刈藻』が版本の形に一般に流布した形跡がないので、一部の学者達のなかで珍重された理由もあるいは『無名草子』の高い評価が関係するのかもしれない。

他の王朝物語の事情も合わせて考えてみたときに、これらの物語の成立は『無名草子』、『風葉集』以後というだけで、あまりに茫漠とし、つかみ所のないことに呆然とする。

つばさに内容を検討するにつれ、江戸時代の用語ではないかと思われる言葉、表現が見出される場合などは、あるいは、江戸時代の、これらの物語を研究した国学者や、民間の学者、知識人達が書いたと考えてよいのではと思う場合も生じてきている。今後は『海人の刈藻』の本文の中に、そのように江戸時代の片鱗を見出すことができないかという観点でも研究を進めたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

塩田 公子 『飲食の言葉』 糸井通浩・神尾暢子編『王朝物語の仕草と言葉』清文堂、185～192頁、2008年

塩田公子 樋口芳麻呂、『夢の通ひ路物語』(校訂本文、現代語訳、頭注、凡例、系図)400頁、三校まで済み、「中世王朝物語全集」第17巻、笠間書院、2010年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塩田 公子 (SHIODA TOMOKO)
岐阜女子大学・文科創造学部・教授

研究者番号：00215948

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：